

令和3年度

劇場・音楽堂等機能強化推進事業

(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	川崎市文化財団グループ	
施 設 名	川崎市アートセンター	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	9,339	(千円)
	公 演 事 業	8,457 (千円)
	人 材 養 成 事 業	0 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	882 (千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	しんゆりシアターミュージカル公演「のっぼの古時計」※	令和3年10月9日～17日	<出演>麻乃佳世、石鍋多加史、上野哲也、前田一世ほか<スタッフ>作：ふじたあさや、演出：河田園子	目標値	1,244
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	870
2	日本児童・青少年演劇団体協同組合「ベイビーミニシアターフェスティバル」※	令和3年5月8、9日	<演目>「あ・の・ね」「マ・プニユンカ!」「まる」<スタッフ>演出：ジャッキー・E・チャン	目標値	112
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	69
3	デフ・パペットシアター・ひとみ「河の童-かわのわっぱ-」※	令和3年4月29日	<出演>榎本トオル、やなせけいこほか<スタッフ>原作：火野葦平「河童曼陀羅」、脚本・演出：立山ひろみ	目標値	156
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	124
4	人形劇団クラルテ「女殺油地獄」※	令和3年5月4、5日	<出演>藤田光平、永島梨枝子、西村和子ほか<スタッフ>作：近松門左衛門、脚色：吉田清治(1973年版)、演出・脚色(潤色)：ふじたあさや	目標値	281
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	246
5	しんゆり寄席※	令和3年6月～令和4年3月	<出演>世話人：初音家左橋、桂米多朗 ゲスト真打：三遊亭兼好、桂幸丸、桂歌助、五街道雲助ほか	目標値	1,560
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	648
6	しんゆりジャズスクエア※	令和3年6月～令和4年3月	<演目>「ジャズギターの巨匠たち」「ムードサックスのサムテイラーが蘇る」ほか<出演>田辺充邦ほか	目標値	743
		川崎市アートセンターアルテリオ小劇場		実績値	513

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	夏休みワークショップフェスティバル 2021※	令和3年7月27日～ 8月9日	① 「舞台でつながれ～！」講師・演出：河田園子 ② 「ことばはオモチャ！」講師：ふじたあさや	目標値	90
		川崎市アートセンター アルテリオ小劇場		実績値	参加者 68/発表 会来場者 127
2	しんゆりアウトリーチ※	令和3年4月、6月	① 「桐光学園コミュニケーションワークショップ」講師：原田亮 ② 「くらすクラス演劇ワークショップ vol.2」講師：大谷賢治郎	目標値	200
		桐光学園、くらす広場		実績値	117
3	川崎市アートセンター小劇場×映像館コラボレーション企画 vol.4 親子で楽しむ映画たんじょう！「映画のはじまりと活弁」※	令和3年7月11日	<演目>演劇「映画のはじまり」、活弁上映「キートンの文化生活一週間」「子宝騒動」<出演>山崎バナラ、Platanus (原田亮、森山蓉子、大谷恵理子)	目標値	155
		川崎市アートセンター アルテリオ小劇場		実績値	85

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>【自己評価】概ね達成しました。</p> <p>令和3年度、新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」とする）の影響はありましたが、全ての事業を中止することなく、様々な工夫をしながら実施しました。<u>時期に応じて、客席収容率の制限、密を避ける為のワークショップ定員や内容の見直しなどを丁寧に行うことで規模縮小の部分もありましたが、文化芸術に出会う機会を継続して提供できました。</u></p> <p>◆社会的役割（ミッション） 「川崎市アートセンターが“文化芸術によるまちづくりの核となる場”になること」 「新しい価値観と出会い、つながる場であり続けること」</p> <p>◆地域の特性等 麻生区は地域住民の強い後押しもあり、昭和57年誕生時より「芸術文化のまちづくり」構想を進めています。この地域は川崎市全7区中、老年（65歳以上）人口は1位、年少（14歳以下）人口は2位となっています。</p> <p>令和3年度はコロナ拡大が事業にも大きく影響しました。その中で状況に応じて、「<u>安全な運営による事業の実施</u>」「<u>継続的に文化芸術に出会う機会を提供すること</u>」を念頭に置き、<u>主催事業を実施しました。</u>公演事業では「ミュージカル」、「人形劇」、「落語」、「ジャズコンサート」と多岐にわたる事業を行い、幅広い年代の地域住民に向けた鑑賞機会の提供をおこないました。<u>普及啓発事業では学校生活で多くの制限を強いられている児童・青少年向けの参加・体験型事業によりコロナ禍で希薄になっている「人とのつながり」を大切にすることを果たすことができました。</u></p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>【自己評価】継続して認められます。</p> <p>当館の主催事業はこの方向性で10年間、運営しており、その中で徐々に劇場のカラー（特色）が出てきたと感じています。また、公的助成金を受けることにより、児童・青少年向けの普及啓発事業を積極的に実施しています。さらに高齢者や障がい者が気楽に来場できる公演事業を、安価なチケット代金で実施できることは「ハードルの低い劇場」として地域に根付くために重要と考えます。</p> <p>■文化的意義 公演事業では、幅広い年齢層が楽しめるオリジナルミュージカル「のっぽの古時計」の企画制作により劇場の財産となる作品の創出を行えました。普及啓発事業の小劇場×映像館コラボレーション企画では「映画のはじまり」を演劇仕立てで見せるオリジナル作品と活弁上映など、意欲的な企画を実施することができました。</p> <p>■社会的意義 デフ・パペットシアター・ひとみ（ろう者と聴者のプロ劇団）の上演は障がい者の芸術活動を知るだけでなく、障がいの有無にかかわらず観客が楽しめる鑑賞機会の提供も行いました。普及啓発事業ではコロナ禍の大きな影響を受けた児童・青少年が演劇を通して「他人を思う想像力」を養い、自己表現の場を設けることができました。</p> <p>■経済的意義 高齢者が多い地域のため、「しんゆり寄席」などはなかなか観客が戻りませんでした。芸術祭大賞受賞後、初の関東上演となった「女殺油地獄」、オリジナルミュージカル「のっぽの古時計」では地域住民のみならず、遠方からの観客を呼ぶことができました。これは、劇場の周知だけでなく、観客の消費行動も発生し、地域の活性化につながると考えます。※参考：アンケートの東京・他県在住者：「女殺油地獄」37%、「のっぽの古時計」53%、その他事業の平均22.3%</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

【自己評価】一部、達成できませんでした。

「安全な運営による事業の実施」「継続的に文化芸術に出会う機会を提供すること」を考の軸に置き、コロナ禍で事業を全て実施することができました。ただし、開催時期の感染状況を踏まえたフレキシブルな対応を求められることにより、動員数（観客、参加人数）などを達成できなかった目標もありました。

■公演事業

<1>目標：児童・青少年と舞台芸術の出会いの場を提供、入場率平均 85%を目指す。

指標：平成 29 年度 3 演目の平均 74.5%、平成 30 年度 3 演目の平均 79.3%より数値を設定

➤結果：3 事業の入場率平均は 93.26%となり、達成できました。

<2>目標：地域住民の多くを占める高齢者が気軽に訪れる劇場となるよう「しんゆり寄席」「しんゆりジャズスクエア」年間パスポート販売数の各 10 枚増加を目指す。

指標：過去 3 年の入場者実績をもとに設定。（令和元年しんゆり寄席：11 枚、ジャズスクエア：28 枚、令和 2 年度はコロナ拡大の影響により販売中止）

➤結果：コロナ禍の影響により、年間パスポートの販売を見送ったため、達成できませんでした。
代わりに、令和 2 年度に引き続き 1 回目を定価で買われたお客様には 2 回目を安く購入できる「リピーター割引」を実施しました。

※参考：しんゆり寄席：令和 2 年度 43 枚➤令和 3 年度 66 枚、ジャズスクエア：令和 2 年度 31 枚➤29 枚

<3>目標：本格的な舞台芸術の鑑賞機会を提供し、作品の満足度平均 95%、入場率平均 85%を目指す。

指標：過去 3 年のアンケートをもとに作品の満足度、入場率目標を設定。

➤結果：作品の満足度平均 94%、入場率 90.66%となり収容人数の制限はありますが概ね達成できました。

・鑑賞型事業の来場者アンケートは、コロナの 3 密対策として、「ロビーではなく客席でゆっくり書いてもらう」「筆記用具をそれぞれに付けて配布」を行ったことにより、回収率が上がり、平均回収率は 41.14%となりました。結果的に感想なども丁寧に書いていただくことが多くなり、お客様の声をより多く、正確に集約することができ、大きな収穫となりました。 ※参考：平成 30 年度の回収率平均は 15.62%（コロナの影響なし）

■普及啓発事業

<1>目標：地域住民へ舞台芸術との出会いの機会を増やすため、ワークショップの受け入れ人数と企画数を増やす。

指標：過去 3 年のワークショップの企画数、参加者数をもとに参加者数 90 名に設定。

➤結果：コロナの影響により、参加者数の増加は達成できず、68 名に留まりましたが、所要時間・内容の見直し・実施回数を増やすことで、受け入れ人数を確保することができました。

<2>目標：アウトリーチ活動の内容の充実と件数の増加<体験型、鑑賞型で 5 件>を目指す。

指標：平成 30 年度：体験型 3 件実施（参加者数 94 名）、令和元年度：体験型 4 件（参加者数 215 名）

➤結果：令和 3 年度はコロナの影響により体験型 2 件（参加者数 117 名）となり達成できませんでした。

<3>目標：実演芸術と映像の融合企画による新しい観客の開拓として入場者数を 85%へ増加を目指す。

指標：小劇場×映像館コラボレーション企画の入場者数 85%への増加を目指す

参考：平成 30 年度「江戸写し絵」入場者 40%、令和元年度「活動弁士沢登翠特集」入場者 77%

➤結果：令和 3 年度は 62.96%に留まりましたので達成できませんでした。

・児童・青少年と関わるが多い普及啓発事業では学校の感染状況や対応が大きく影響しました。アウトリーチ活動では部外者の入校禁止等もあり規模縮小を余儀なくされ、またワークショップでは地域の学校のコロナ対応に合わせた安全対策をして運営を行いました。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【自己評価】概ね達成できました。

令和3年度の8事業を全て実施できました。

公演事業は予定通り実施できましたが、客席収容率等の制限に加え、コロナが収束しない社会状況により観客の来場自粛の空気も根強く、多くの観客を迎えることはできませんでした。企画内容の検証だけでなく、コロナ禍で劇場から遠ざかってしまった観客をいかに取り戻すかは今後の大きな課題と言えます。

特にコロナ禍の影響を大きく受けたのは普及啓発事業（ワークショップ、アウトリーチ）です。ワークショップでは「歌うことを避ける、参加者同士の距離を保って楽しめる内容」を考え、現場での密を避けるため、参加定員を減らす、食事時間を設けない、時間短縮をおこなうなど運営の工夫をしました。またアウトリーチでは学校への部外者の入校禁止、部活動の活動制限により、事業規模は縮小傾向となりました。

◇参考 川崎市アートセンター 来場者総数 (単位：人)

	小劇場 (貸館含む)	映像館	施設合計
平成30年度	23,331	61,157	84,468
平成31年度※	21,518	58,837	80,355
令和2年度※	4,199	30,347	34,546
令和3年度※	13,622	36,503	50,125

※平成31年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けています。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【自己評価】計画通りに進みませんでした。

計画していた8事業は予定通り実施できました。鑑賞型事業では、客席収容率の制限や、舞台から客席までの距離を確保するため、使用できる客席数が少ない中での実施となり収入増加は見込めない状況でした。加えて高齢者が多く来場する事業（例：しんゆり寄席）は集客が大きく伸び悩みました。アフタートークを行うなど普段とは異なることも実施し、対策も行いましたが、集客の回復にはつながりませんでした。**今後は若年層、児童・青少年を含むより多くの幅広い世代の地域住民に楽しんでいただけるよう、さらなる工夫をしていきたいと考えます。**

(※参考：アンケートによる70歳以上の割合 令和3年度：14%、平成30年度(コロナの影響なし)：40%)

また、ワークショップではコロナ対策として1クラスごとの参加人数を減らし、実施回を増やしましたが、当初目標としていた人数を受け入れることはできず参加費収入減は避けられませんでした。

(※参考：目標90名▶結果68名)

他方、支出面では予定通りに実施できたものの、舞台費、文芸費等を大幅に節約することはできず、また検査費用等コロナによる経費もかかるため、大きく縮小することはできませんでした。そのため、収支バランスで見ると、結果的には課題が残りました。

◇予算に対する決算比率 (単位：%)

	収入	支出
公演事業	65.55%	94.62%
普及啓発事業	54.39%	69.82%
平均	60.25%	82.22%

4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

【自己評価】概ね認められる。

川崎市が平成16年より「音楽のまち・かわさき」、平成20年より「映像のまち・かわさき」を推進しています。当館のある川崎市麻生区はそれ以前より、地域住民の強い後押しもあり、昭和57年の麻生区誕生時より「芸術によるまちづくり」構想をすすめてきました。この機運のなか、当館は地域の文化芸術の拠点となるべく、平成19年に開館しました。地域住民の年齢層やニーズを踏まえつつ、事業を展開しています。

■地域住民のニーズを見据えた事業

川崎市全7区のうち、麻生区は老年（65歳）以上の人口が1位（23.4%）、年少（14歳以下）人口は2位（13.2%）となっています。「芸術によるまちづくり」構想のなか様々な芸術系イベントも多く、鑑賞のほかに、運営を行うアートボランティアに参加する高齢者も多い地域です。彼らが地元の劇場に気楽に通える企画として「しんゆり寄席」「しんゆりジャズスクエア」を通年で実施しました。

また、児童・青少年にむけ、鑑賞事業としてミュージカル「のっぽの古時計」「河の童-かわのわっぱ-」「ベイビーミニシアターフェスティバル」、ワークショップでの参加体験機会を設けるなど、長期的な視野で文化芸術愛好家の育成を目指し、児童・青少年が赤ちゃんから10代まで年代ごとに楽しめる事業を配しました。



しんゆり寄席（第100回記念アフタートーク）



ベイビーミニシアターフェスティバル

■新しい価値観の提案

「地域住民が観たいもの」だけでなく、「地域住民に新たに会って欲しい企画」という視点をもって事業を企画しています。人形劇団クラルテ「女殺油地獄」は本格的な大人の人形劇の鑑賞機会の提供、「小劇場×映像館コラボレーション企画」では映画・演劇ファン両方が楽しめる企画立案など、当館だから出会える事業を発信することができたと考えます。

また、「小劇場×映像館コラボレーション企画」では「映画のはじまり・しくみ」についてオリジナル台本を作成し、演劇・映像を組み合わせた小作品を活弁映画上映とともに上演しました。この小作品は子どもたちや映画初心者にも大変分かりやすく映画を学べるとして好評だったため、今後、ブラッシュアップシアウトリーチ活動に展開したいと考えます。



人形劇団クラルテ「女殺油地獄」



小劇場×映像館コラボレーション企画「映画のはじまりと活弁」

■オリジナル企画の創出

主催事業では地域住民へ質の高い文化芸術との出会いの場を提供しており、オリジナル企画も展開しています。ミュージカル「のっぽの古時計」は構成・脚本もゼロから立ち上げ、劇場の財産となる作品を生み出すことができました。小劇場×映像館コラボレーション企画、市民劇団・劇団わが町の活動、ワークショップなどいずれの主催事業も、幅広い年代が楽しめる、地域の文化芸術の拠点として当館が求められているニーズを踏まえたオリジナル企画となりました。



しんゆりシアターミュージカル公演「のっぽの古時計」



夏休みワークショップフェスティバル「舞台でつながれ～！」

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

【自己評価】概ね認められる。

文化芸術に触れる入り口として、コロナ禍でありながら、鑑賞型・参加体験型の事業を配し、さらにアートボランティア等の地域住民との繋がりを深めています。地域の文化芸術の拠点として、文化交流の場として、また芸術祭等のイベント会場として施設提供を行うなど、ソフト・ハード両面でその存在意義を深めつつあります。

■地域住民の芸術活動の入り口

来場者アンケートによると、居住地の平均 56%が川崎市在住、特に麻生区については 38.38%を占めます。一部、他地域からの来場者が多い事業もありますが、やはり観客の多くは地域住民です。鑑賞型、参加体験型事業ともに地域における文化芸術の幅広い入り口となっています。

また、川崎市北部を中心に開催される「川崎・しんゆり芸術祭」を中心に活動するアートボランティアは地域の高齢者を中心に 130 名を超える方々が活躍しています。（コロナ以前、平成 31 年度は 200 名が登録）

当館でも、「演劇」、「落語」、「児童・青少年演劇」に興味を持つアートボランティアが主催事業の運営に多く参加しています。

客席からの鑑賞だけでなく、運営に参加し事業を支えることで、地域住民が新たな視点をもって文化芸術に興味を持つ機会となっています。今後はさらに幅広い世代、初めて参加するアートボランティアとの出会いを増やし、当館の周知を進め、文化芸術に親しむ地域住民の裾野を広げたいと考えます。

■コロナ禍での積極的な運営

コロナ禍では、一般的に緊急事態宣言中の施設休館、事業を中止するという消極的な選択をすることも多くなりました。その中で、当館は令和 2 年度は 9 事業のうち、2 事業が中止となりましたが、令和 3 年度は全事業を実施することができました。

「文化芸術を観る機会も、上演する機会も途絶えさせない。」という姿勢をもった運営を年間通して実施。地域住民が文化芸術に触れる機会を継続的に提供することができました。

観客だけでなく、運営に参加するアートボランティア、スタッフ・出演者に至るまで、劇場・稽古場それぞれに必要な感染症対策を講じ、安全な運営を心掛けました。お客様からは「生の演奏や歌は素晴らしい」（しんゆりジャズスクエア）、「上演という大変勇気あるご選択、ありがとうございました。」（河の童）など、実施したことを評価するアンケートをいただきました。

コロナ禍の終息がまだ見えない状況のなか、劇場を運営する私たちにとっても、今後、文化芸術をいかに途絶えさせないかを考える機会となりました。

■文化芸術の拠点として（ステークホルダーとの連携）

「芸術によるまちづくり」を進めるこの地域では、「あさお文化交流カフェ」を実施しています。これは麻生区、地域の芸術団体、教育機関、関係団体、32 団体で構成されており、年に数回の交流会を当館で実施しています。また、地域で実施されるイベントにも多く協力、「KAWASAKI しんゆり映画祭」「川崎・しんゆり芸術祭」は当館の特定事業として施設提供や運営協力、「川崎・しんゆり芸術祭」では事務局機能も担っています。公演事業-2.3.4 はこの芸術祭の参加作品としてラインナップの一翼をになっています。

川崎市アートセンターは令和 4 年に開館 15 周年を迎えるにあたり、主催事業を充実させるだけでなく、文化芸術団体との情報発信と交流の拠点という点でもフリースペースの活用などを広げていきたいと考えております。様々な形で地域と繋がることで、ソフト・ハード両面から地域の文化芸術の拠点としてより一層定着しつつあります。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

【自己評価】概ね認められる。

事業満足度等、アンケートでは企画内容については評価をもらっているが、人材養成、経営戦略については長期的視野をもった取り組み（体制づくり）が遅れていると感じており、最優先の課題と考えます。

■事業運営

鑑賞型事業の来場者アンケート集計によると、内容に対する満足度について、95.63%が「満足・大満足」としていること（回収率平均 41.14%）、ワークショップなど参加体験型事業の参加者アンケートでも 86.5%（参加者全員が記入）が「また参加したい」という回答は、コロナ禍でも文化芸術に親しみたいという地域住民の期待感に応える企画内容であったと受け止めています。

アンケートだけでなく、運営に参加するアートボランティアの生の声にも耳を傾け、コロナ対策などの運営のアイデア、スムーズなお客様対応など事業全般について細やかなブラッシュアップにつなげています。

■職員人事・人材戦略

職員人事は、雇用形態はさまざまですが、特に専門性の高い事務制作職員は6年目以降無期雇用に転換することで職員の人材養成だけでなく、職員全体が施設の特性や地域への深い理解をもって業務に臨んでいます。

職員研修について、舞台技術職員は、「舞台演出を支える劇場技術」（全国劇場・音楽堂等職員舞台技術研修）、など最新の情報収集をおこなっています。また、事務制作職員は「貸館の打ち合わせ～作業現場における安全管理の基本」（KAAT）、全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会へ参加。それぞれの仕事の専門性を深めることができました。令和3年度は同研修会において、小劇場ディレクターが研修名「事業が目的化しない企画立案の方法」に講師として参加し、日々の取組を客観的な視点で見直す、大きな学びとなりました。

研修での学びを報告書にまとめ、職員間の共有、さらに具体的な運営に反映できる点は早急に改善・ブラッシュアップまで行うよう心がけています。今後はより職員の研修の参加率をあげる、また接遇研修など施設全体の運営の質の向上を目指した職員研修を取り入れていきたいと考えます。

■経営戦略

川崎市の指定管理のもと、第2、3期（平成24年度～令和3年度）まで2期10年にわたり、管理運営をおこなってきました。令和4年度から第4期（令和4～8年度）5年間の指定管理者の指名を受けています。継続的な事業展開は劇場の色付け（特色付け）の大切な要素であると考えます。

当館のある川崎市北部は商業地域ではなく住宅地です。また小劇場（195席）、映像館（111席）の小規模複合施設である当館は事業規模が小さく、大規模な広告収入・寄付金集めがなかなか見込めません。

その中で、開館15年を迎え、「主催事業ごとに少額の応援寄付を立ち上げる」「会員制度を立ち上げ劇場の顧客を獲得する」など、劇場の存在をより定着させるため、課題に向き合う必要がある時期にきています。これは観客層のベースづくりとなるだけでなく、地域住民にとって劇場がより身近な存在となるための重要な課題です。

■ネットワークの構築

川崎市アートセンター運営協議会（年2回開催）では、地域の文化関係、教育関係の有識者との意見交換を行っています。また、麻生区、地域の芸術団体、教育機関、関係団体による「文化交流カフェ」を当館で開催し、地域の様々な団体との連携、情報交換の拠点として、開館15年を迎え、さらに中心的な役割を担っていきます。

教育機関との連携では、主催事業でのインターンシップの受け入れは継続的に行っており、令和3年度は昭和音楽大学アートマネジメントコースより2名受け入れました。中学生の職場体験、県立高校教師の研修など積極的に協力しています。

他館との連携として、令和3年度に共催事業としてKAAT 神奈川芸術劇場の県内ツアー、沖縄りっかりっかフェスティバルが中心となって招聘する海外児童劇の国内ツアーへの参加を行っています。他館との連携は事業の充実につながるだけでなく、職員にとっても貴重な学びの機会となります。

■施設面

開館15年を迎え、老朽化も始まっており、施設・設備の中長期修繕計画を立てて運営しています。

特に、令和3年度は文化芸術振興補助金（文化施設の感染拡大予防・活動支援環境整備事業）の採択により、VLAN工事によるネット環境の整備を行いました。貸館利用者も含めて施設の利便性の向上を目指し、コロナ禍で増加するオンライン会議、動画配信の利用ニーズを見据え、安定した環境づくりを行いました。

観客・貸館利用者の声を丁寧に吸い上げ、安全管理・利便性を踏まえた運営につなげたいと考えています。